

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 伊吹島アクセントの式音調について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中井, 幸比古 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/500">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/500</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 伊吹島アクセントの式音調について

中 井 幸比古

要旨 香川県伊吹島方言の3式の式音調について、中井編(2009)所収の、和田實氏録音・中井録音の音声ファイルを資料として、無核型を対象に音響分析を行い、以下のような事柄を解明・確認した。話者は1898, 1928, 1951生の3名。但し話者1928は5拍語のみ。

(1)もっとも生年が早い話者1898も含め、3名とも3式の対立は明瞭である。

(2)F0型：3名の話者全員、初頭から2拍目辺り(短い単語では1拍目)まで上昇し、それ以降なだらかに下降する。しかし、なだらかな下降の様子は話者により異なる：話者1928と話者1951は、話者1898に比べてやや早く下降が始まり、下降がやや直線的。それに対して話者1898は単語の末端近くまでは、下降はあるがその度合いが小さく、ようやく末端間近でやや大きくなる。これは、耳で聞いた「下の世代のほうがF0型の下降の度合いが大きい」という結果と一致する。

(3)H0型：初頭部分の上昇、末端部分の下降を除くと、語の中心部分では、ごくわずかな下降(F0型に比べて極めて小さい)はあるものの、ほとんど同じ高さを保っている。2・4・5拍語については、話者1951の下降の度合いが話者1898・1928(1928は5拍語のみ)よりも大きくなっている。3拍は不明確。また、2拍語では、話者1898の語頭拍がやや低く、その後上昇する傾向がある。下の世代(1951)で、F0型の下降が大きくなるにつれて(それにやや遅れて?)、H0型のわずかな下降に対する許容度が大きくなった可

能性がある。

(4) L0型：個人差はないようで、末尾近くまで一貫して上昇を続け、そこで一層上昇が大きくなり、最後は平坦となる。言い切りの場合、休止直前の末尾でわずかに下降する。

(5) 語頭の高さ：L0型が H0型・F0型に比べて著しく低く、L0型を低起式、H0型・F0型を高起式とするにふさわしい。最も高い箇所（F0・H0型は語頭に比較的近い場所、L0型は末尾近く）の基本周波数は、F0型が H0型より少し高く（亀田2006の資料でも同じ）、L0型は H0型よりわずかに低い。同じ高起式に属しながら H0型より F0型が高いのは、下降に備えてその前を高くしようとするものか。

(6) 核による下降の遅れ：2拍 H1型を例として核による下降の遅れを確認した。

## はじめに

香川県伊吹島方言のアクセントは、音調型について、以下の2点の年齢差があることが知られている（和田1996、上野1985・1995、佐藤1985）。

- (1) 高起下降式（F式）の下降の度合いが、およそ昭和初年以降で拡大。
- (2) 核による下降位置の遅れについて、個人差が大きいが、下の世代に遅れが目立つ話者が多い。

伊吹島アクセントの音響分析を行ったものに亀田（2006）などがあるが、上の2点に関する言及はなかったようである。そこで、本稿では(1)を中心に、式音調全般に関する音響分析を試みる。そして高起下降式の音調の世代差だけでなく、高起非下降式（H式）の音調にも世代差が存在する可能性を指摘する。(2)についても簡単に触れる。

## 1. 考察範囲・分析方法

1.1 録音資料は中井編（2009）収録の一部を用いる。即ち、和田實氏録音

(1966年頃)の話者1898smm (1898 [生年]+ sm [話者略称]+ m [男性])と話者1951tkm (1951 [生年]+ tk [話者略称]+ m [男性])の2名と、中井録音(2008年)の話者1928kmf (1928 [生年]+ km [話者略称]+ f [女性])の1名である。以下、話者を生年(1898, 1928, 1951)のみで示す。

耳で聞いた範囲で、上記2点について、話者1898は古いタイプに属し、話者1951・話者1928は新しいタイプである。話者1898は今では録音不能な上の世代の貴重な資料である。なお、2009年現在の50代後半より下の世代については別に調査が必要である。

対象資料の中から、2～5拍体言のF0(高起下降式無核)型・H0(高起非下降式無核)型・L0(低起上昇式無核)型の語彙を抜きだして考察する。2～4拍は中井(2001)・上野(2007)の聴取が同一の語のみとする。5拍の聞き取りは中井(2009)所収の解説ファイルに従う。語彙一覧は稿末参照。本稿で扱う語彙は、当該項目について対象とする話者全員の発音があり、かつ音韻論的アクセント型が一致するものだけである。話者間の比較を行う際も、すべて同一語彙・音韻論的型が一致するもののみを用いた。

話者1898は2～5拍すべて名詞単独言い切り。話者1951は2～3拍が名詞単独言い切り・4～5拍が助詞ガ付き言い切り。話者1928は5拍のみの録音で、名詞単独言い切りである。

録音状態がよくないものが多いので精密な分析は難しいが、このような録音でも、案外、或る程度はf0(基本周波数)の抽出が可能のようである。分析ソフトはPraat(version 4.6.02)を用いた。なお、本稿では基本周波数f0のエフを小文字fとし、高起下降式を大文字Fとする。

1.2 分析方法は以下のようである。

①長さを正規化するため、当該の語・文節について等間隔に、2拍32箇所、3拍48箇所、4拍64箇所、5拍80箇所、6拍96箇所のf0値を測定する。拍ごとにセグメンテーションを施す方法も考えたがスペクトログラムを活用

できない録音状態のものも多く、そもそも分節音の組み合わせ・種類によってはセグメンテーションが不可能なものもあるわけで、とりあえずこの方法によった。

②話者別に、当該の拍数・音調型に所属する語彙全体の、上記①の各箇所での  $f_0$  の平均値を取る。対象語彙は、対象話者すべてについて同一とする。

③上記②の  $f_0$  平均値の、初頭から末尾までの間の最高値を基準として、各箇所がそこからどの程度音が低いのかを示す。単位は半音値（セミトーン [st]）を用いた。音の絶対的高さの明示のため、 $f_0$  の最高値も併せてあげる。

なお、語頭の子音の長さは、雑音に埋もれて測定困難な場合も多く、原則として含めなかった。例外的に5拍語は一部の録音状態がややよかったので含めた。一貫性の点で問題があるが、4拍以下の結果と全く矛盾がない。また、語頭・語末拍が無声化している場合はタイミングが著しく狂うので、大雑把な測定によって含めた。一般に、初頭・末尾付近は  $f_0$  抽出が不安定になるが、とくに録音状態が悪いと問題が生じがちのようである。初頭・末尾は、 $f_0$  抽出が比較的正しく行われていると思われる範囲までとしたが、これについては今後の課題である。

また、明らかな分析ソフトの測定ミスは削除して空白とした。子音（特に無声子音）の影響で  $f_0$  が変化している部分も排除し、空白とした。有声子音の場合、その影響をどこまで認めるかについては微妙な場合が多い。今後の課題であるが、論旨を左右するほどのものではないと考える。

## 2. 分析結果

### 2.1 F0型とH0型

#### 2.1.1 結果の概要

F0型とH0型の音調について、5拍から2拍の順に、拍数別に見ていく。

先に結論をまとめておく：

F0型について。話者全員、初頭から2拍目辺り（短い単語では1拍目）

まで上昇し、それ以降なだらかに下降する。しかし、なだらかな下降の様子は話者によって異なる：話者1928と話者1951は、話者1898に比べて早く下降がはじまり、下降がやや直線的である。それに対して話者1898は単語の末端近くまでは、下降はあるもののその度合いが小さく、ようやく末端間近でやや大きくなる。場合によっては、末端の高さが、話者1928・1951とそれほど変わらなくなることがある。

これは、耳で聞いた、「下の世代のほうがF0型の下降の度合いが大きい」という印象に一致すると考えてよい。

H0型について。初頭部分の上昇、末端部分の下降を除くと、語の中心部分では、ごくわずかな下降（F0型に比べて極めて小さい）はあるものの、ほとんど同じ高さを保っている。2・4・5拍語については、話者1951の下降の度合いが話者1898・1928よりも大きくなっている（3拍は不明確）。また、2拍語では、話者1898の語頭拍がやや低く、2拍目にかけて上昇気味となる。

中井（2009）所収の解説ファイルでも触れたが、F0型の下降が大きくなるにつれて（それにやや遅れて？）、H0型のわずかな下降に対する許容度が大きくなった可能性がある。但し、発話速度などが関係する可能性もある。

絶対的な基本周波数（ $f_0$ 値）については、その最高値がF0型のほうがH0型よりもやや高い。これは、亀田（2006）p.11の図5でも同じである。同じ高起式に属しながらH0型よりF0型が高いのは、下降に備えてその前を高くしようとするものか。

なお、H0型とF0型全般にわたって、話者1898は、話者1951より語頭がやや低く始まる場合が多い。これは、発話のスタイル（話者1951よりゆっくり丁寧）が関係しているのかもしれない。

## 2.1.2 5拍語

5拍語は話者1898（単語単独言い切り）・1928（単語単独言い切り）・1951

(ガ付き言い切り) 3名の結果を提示する。

図1と図2にF0型の、図3と図4にH0型の結果を示す。

基本周波数 ( $f_0$ ) の最高値は以下のものである。図1 (F0型) につき、話者1898 (男性・録音時60歳代) は162Hz, 話者1928 (女性) は248Hz。図2 (F0型) につき、話者1951 (男性・録音時中学生) は201Hz。図3 (H0型) につき、話者1898は152Hz, 話者1928は230Hz; 図4 (H0型) につき、話者1951は189Hz。

F0型のほうが、H0型よりも最高値が一貫して、少し高い。これは4拍語以下にもほぼ当てはまる。

図2のガの子音の中心はおよそ69/80あたり、図4は62/80あたりであ

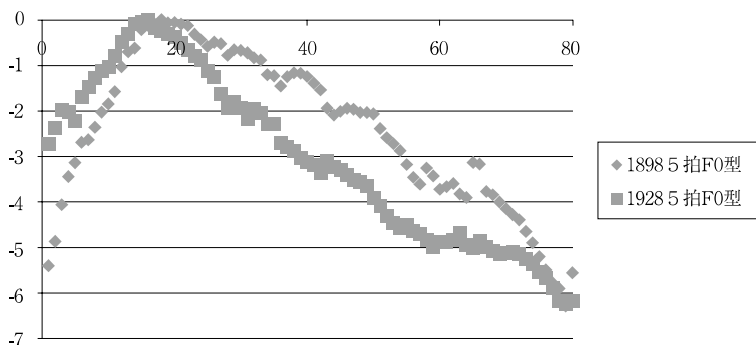


図1 5拍F0型単独言い切り (話者1898, 1928)

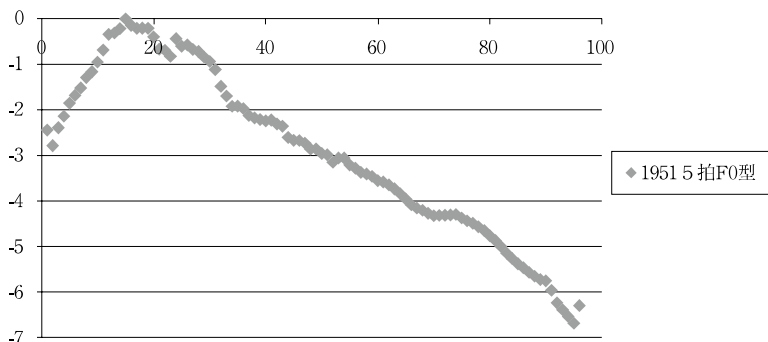


図2 5拍F0型ガ付き言い切り (話者1951)

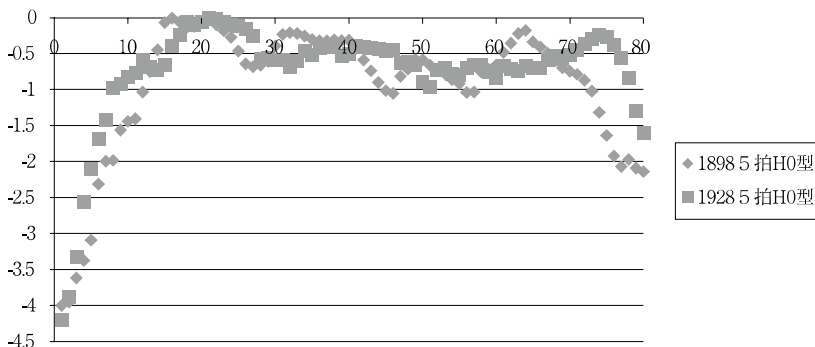


図3 5拍H0型単独言い切り（話者1898, 1928）

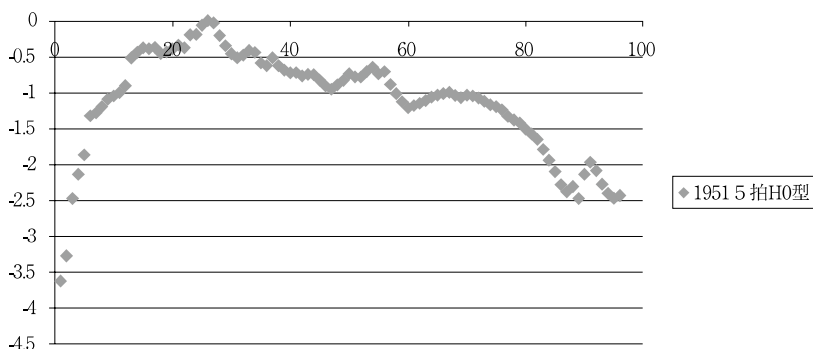


図4 5拍H0型ガ付き言い切り（話者1951）

る。H0型のほうがF0型よりもガの開始が早い（ガの部分が長い）のだが、これは4拍語についても該当する。F0型は、核による下降の後ほどではないが、語末が弱まりがちだからであろうか。

F0型については、語頭からやや直線的に上昇した後、3人とも下降している点は共通である。しかし、年齢が下の2人は下降が急でほぼ直線的で、30前後で局所的にやや急激に下降するように見える。これに対して、話者1898は少し膨らみがあり、下降が遅れる様子が見て取れる。末尾の80のあたりの数値はそれほど変わらない。但し、言い切りの場合、録音状態によって、どこまで語末のF0値が抽出できるかにばらつきが出る可能性もある。



「第2拍から第3拍への下降」については、セグメンテーションを施していないので不明だが、第2拍のあたりで音調の方向が明確に転換しているわけで、特に話者1928・1951については、聴覚印象を裏付けていると考える。

一方、図3・図4のH0型については、話者1898・1928については、初頭・末尾をのぞきほとんど平らである。耳で聞くと、時に、わずかに下がった後、再度音調の立て直しをはかって、当初の高さに復帰しようと頑張る？ような音調がある。図3の末尾やや近くの、わずかな上昇は、こういった音調の反映かと思われる。

それに対して、話者1951は、F0型よりずっと小さいが、やや下降している。話者1951は、ガ付きという環境や、発話速度が話者1898より速いことが影響している可能性もあるが、世代差があると考えておく。

### 2.1.3 4拍語

4拍語の資料は、話者1898と話者1951のみである。F0型・H0型ともに5拍語とまったく同じことが言える。図5から図8を参照されたい。

なお、図6の子音gはおよそ56/64前後、図8はおよそ51/64前後。F0型について、話者1898の基本周波数( $f_0$ )最高値162Hz、1951は202Hz。H0型について、話者1898の $f_0$ 最高値は146Hz、話者1951は189Hzである。

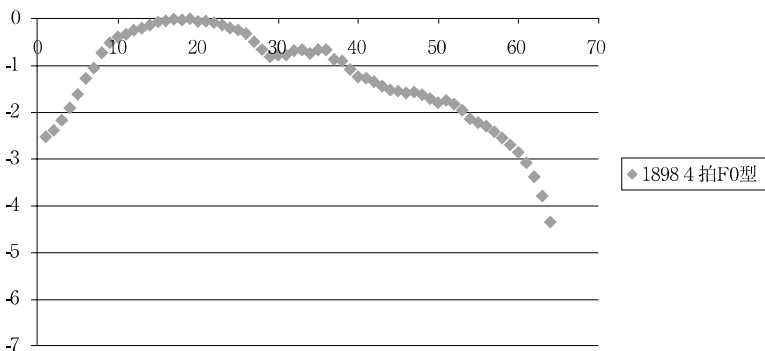


図5 4拍F0型単独言い切り (話者1898)

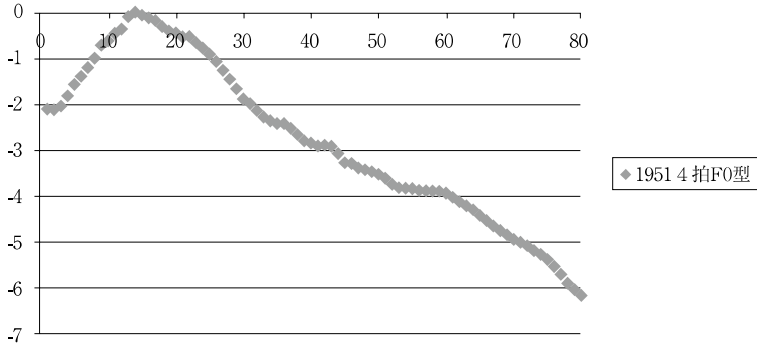


図6 4拍 F0型ガ付き言い切り (話者1951)

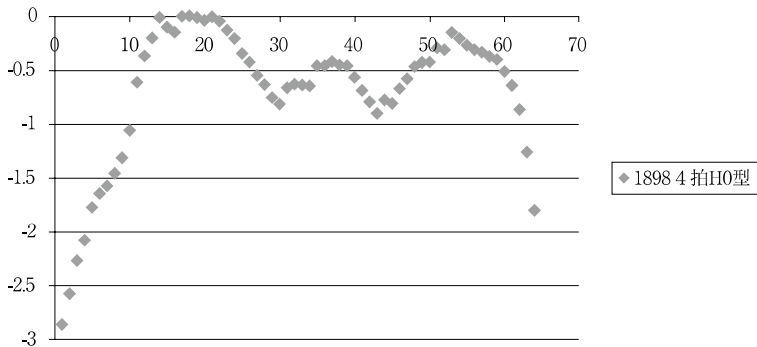


図7 4拍 H0型単独言い切り (話者1898)

#### 2.1.4 3拍語

3拍以下は、話者1898・1951の2名の、単語単独言い切りのみを資料とする。この部分は録音状態がとくに芳しくないのだが、それでも或る程度は有効な結果が得られたと思う。

F0型の下降については、5拍・4拍と同様、話者1951のほうが下降がはやくはじまり、直線的に下がるのに対して、話者1898は下降の始まりがおそく、末尾近くまで下降の度合いが小さく、ようやく末尾付近で下降する。

H0型については、5・4拍語と異なり、二人の間の差異は少ない。話者1951のほうが末尾付近でわずかに下降が早く、話者1898は語頭付近が低い。

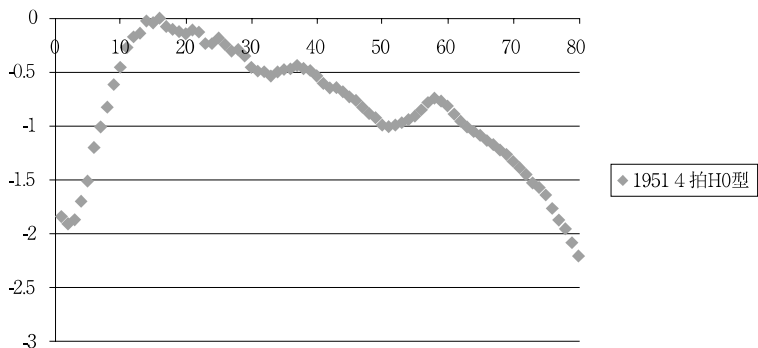


図8 4拍H0型ガ付き言い切り (話者1951)

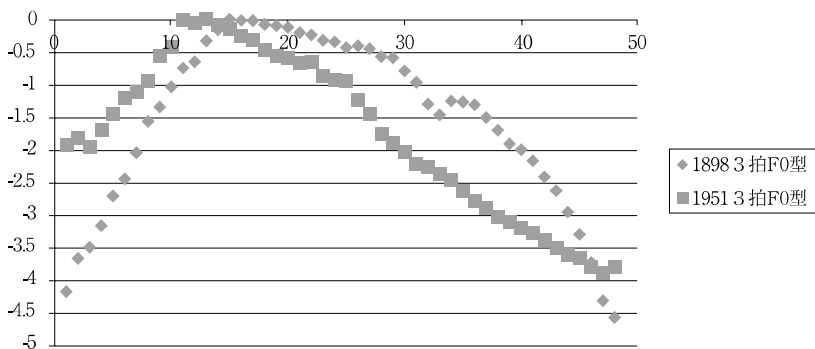


図9 3拍F0型単独言い切り (話者1898, 1951)

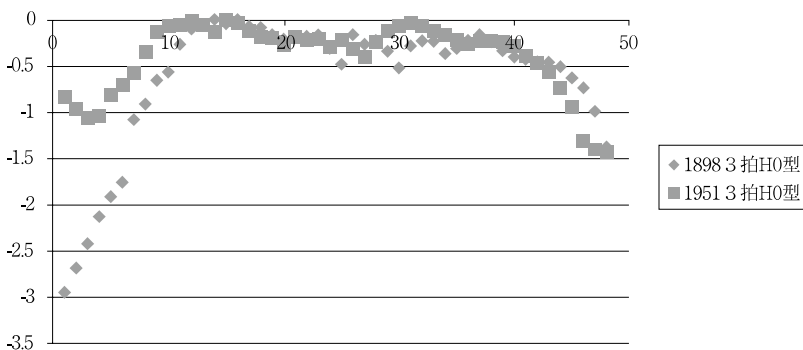


図10 3拍H0型単語単独言い切り (1898, 1951)

F0型の f0 の最高値は、話者1898が137Hz、話者1951が199Hz。H0は話者1898が133Hz、話者1951が185Hz。F0型の方がやはり高い。

### 2.1.5 2拍語

2拍F0型の下降については、5～3拍と同様、話者1951のほうが下降がはやくはじまるのに対して、話者1898は下降の始まりがおそい。

H0型については、5～4拍と同様、話者1898のほうが下降が小さい。また、話者1898のほうが語頭が低い音調が多い。

F0型の f0最高値は話者1898が134Hz、話者1951が183Hz。H0型は、話者

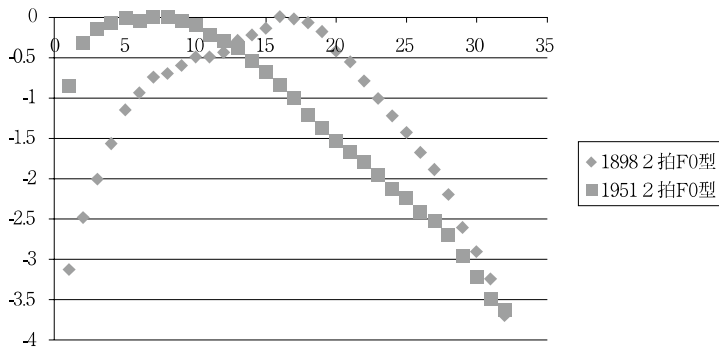


図11 2拍F0型単語単独言い切り (1898, 1951)

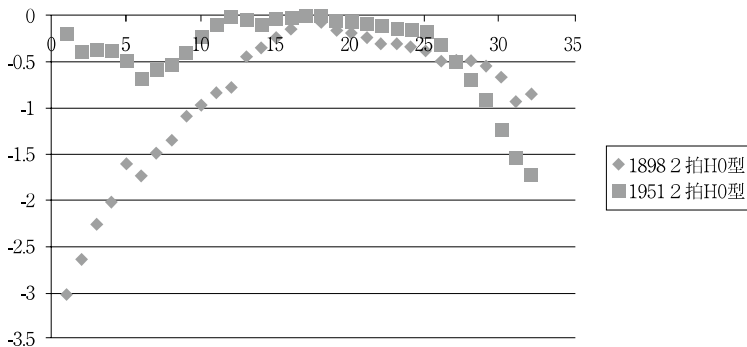


図12 2拍H0型単独言い切り (話者1898, 1951)

1898は134Hz, 話者1951が176 Hz。5～3拍はすべてF0型のほうが数字が大きかったが、2拍語のみ話者1898は同じで、例外的。

## 2.2 L0型と, H0型・F0型の比較

L0型については1898の発話のみを対象とする。遅上がり（言い切りで末尾拍が高）の語のみを扱う。遅上がりの音調は、耳で聞いた範囲で顕著な年齢差はない。なお、複合名詞の場合は、L0型の上昇位置が語構成によって異なり（上野1985, 佐藤1985）、また年齢差ないし個人差もあるようだが、これについては別の機会に譲る。

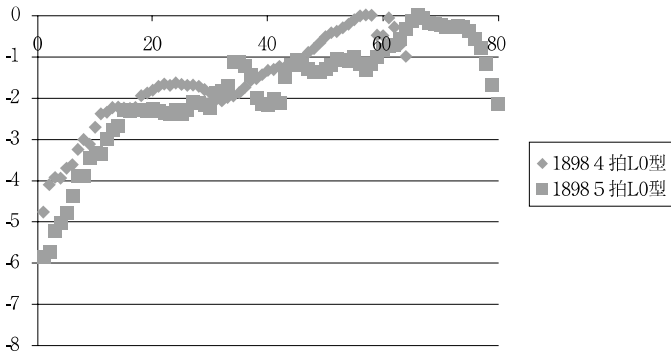


図13 4・5拍L0型単独言い切り（話者1898）

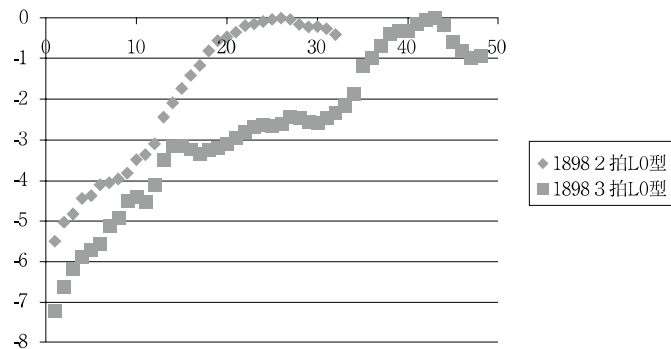


図14 2・3拍L0型単独言い切り（話者1898）

図13・14からわかるように、L0型は語頭がもっとも低く、それが末尾に向かって上昇する。上昇の度合いは末尾のやや近くで急になり、その後平坦、さらに休止直前でやや下降する。最後の下降は休止の準備のためだから、上昇式というにふさわしい音調である。

ところで、F0型・H0型も、語頭がやや低く、語頭近くでは上昇が見られた。L0型と比べて、どのような違いがあるだろうか。

	2拍	3拍	4拍	5拍
L0型最高 f0 (Hz)	133	129	141	154
L0型語頭 (st)	-5.5	-7.24	-4.77	-5.87
F0型最高 f0 (Hz)	134	137	162	162
F0型語頭 (st)	-3.12	-4.2	-2.09	-2.43
H0型最高 f0 (Hz)	134	133	146	152
H0型語頭 (st)	-3	-2.94	-2.86	-3.61

表1 基本周波数最高値・語頭の高さ（話者 1898）

表1に、語頭の高さ（語の中でもっとも高い箇所の f0を基準とする半音値 [st]）と、語の中でもっとも高い箇所（F0・H0型は語頭に比較的近い場所、L0型は末尾近く）の基本周波数 f0を示した。

語頭の高さについては、L0型がH0型・F0型に比べて著しく低く、L0型を低起式、H0型・F0型を高起式とするのが妥当であることがわかる。語頭部分はどこまでを採用するか判断が微妙で、或る程度、数字は不確定な面はあるが、L0型とH0型・F0型との音程の開きは確実である。

最も高い箇所（F0・H0型は語頭に比較的近い場所、L0型は末尾近く）の基本周波数は、F0型がH0型より少し高く（亀田2006の資料でも同じ）、L0型はH0型よりわずかに低い。同じ高起式に属しながらH0型よりF0型が高いのは、下降に備えてその前を高くしようとするものか。

### 2.3 2拍H1型の下降の遅れ

アクセント核による下降の、下降位置の遅れについては2拍H1型について扱うにとどめる。図15からわかるように、明らかに話者1951のほうが下降の開始が遅れている。耳で聞いた「○' ○→「○○”の変化に対応している。話者1898の発話も、耳で聞いて、下降の遅れが皆無ではないが、話者1951に比べてずっと遅れが小さい。なお、f0の最高値は、話者1898が136 Hz、話者1951が183Hzである。

2拍H1型（図15）と2拍F0型（図11）の差異は、話者1898・1951ともに明確である。念のため表2に改めて結果をまとめた：2名ともH1型のほうがF0より語末の下降の度合いが大きい（1951でH1型の語末の下降がやや小さなのは下降の遅れ〔2拍H1型の基本周波数f0最高点位置17を参照〕が関係）。F0型の基本周波数f0最高点位置の違いについては何度も触れたが、

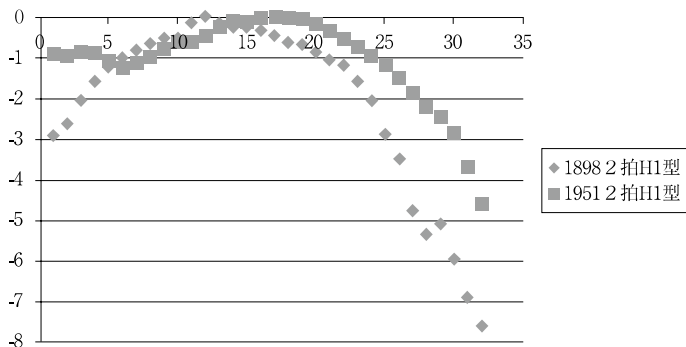


図15 2拍H1型単独言い切り（話者1898, 1951）

	2拍H1型		2拍F0型	
	語末の高さ (st)	f0 最高点位置 (語頭1, 語末32)	語末の高さ (st)	f0 最高点位置 (語頭1, 語末32)
話者 1898	-7.62	12	-3.69	16
話者 1951	-4.62	17	-3.61	8

表2 2拍H1型・F0型の語末の高さ・f0 最高点位置

1898のほうが下降の開始が遅れがちである。

## 2.4 音調の揺れ

これまで、各話者・各音調型の音の高さの平均値のみを考察してきた。各話者・各音調型内部で、どの程度の音調の揺れがあるかを見ておこう。

表3・表4は、話者1898と話者1951の無核型について、語頭から語末までの各測定箇所でのf0値の標準偏差を算出し、その標準偏差の平均値を取ったものである。10Hz以内に収まっていることがわかる。各話者・各音調型の標準偏差の最大値も併せてあげておくと、最大でも14Hz程度である。特定の音調型にだけ揺れが極端に大きくなるという現象は見られない。各話者の、各音調型の音調は安定したものと考えられる。

この数値は、種々の不適当と思われる数値を除去した後のものである。その処理のしかた次第で数値は動くのだが、一応の目安にはなるだろう。

	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	5拍名詞
F0型 f0値の標準偏差平均	5.9	5.5	6.1	9.6
H0型 f0値の標準偏差平均	5.5	5.2	7.3	7.6
L0型 f0値の標準偏差平均	6.3	5.2	6.5	6
F0型 f0値の標準偏差最大	14.2	11.6	8.8	12.4
H0型 f0値の標準偏差最大	12	12.6	10.2	12.2
L0型 f0値の標準偏差最大	9.4	8.3	12.2	9.5

表3 各音調型 f0 値の標準偏差の、平均・最大値 (話者 1898。単位 Hz)

	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞+ガ	5拍名詞+ガ
F0型標準偏差平均	6.3	6.6	7.6	7
H0型標準偏差平均	5	4.9	6	7.4
F0型標準偏差最大	9.6	13.3	10.3	10.7
H0型標準偏差最大	10.4	9.2	12.2	13.3

表4 各音調型 f0 値の標準偏差の、平均・最大値 (話者 1951。単位 Hz)



## おわりに

本稿で扱った資料は分量が少ないが、現在録音不能な上の世代の話者(1898)については、これが唯一の資料であって、本稿の分析は意味を持つと考える。下の世代については、今後一層の資料整備が必要である。

また、本稿では、式音調について伊吹島アクセントのみを扱ったが、他方言との比較が問題になる。

伊吹のH0型の音調は、先行諸文献に提示されている、近畿中央部の中央式アクセントの高起平進式無核の音調に関する数値(例えば中井2007)からみて、それとは異なることが明らかである(中央式高起平進式無核ではなだらかな下降がみられる)。特に、伊吹島の上の世代の音調は近畿中央部のそれと相違点が大きいであろう。

一方、伊吹島のF0型の音調は、下降が大きくなっている下の世代(話者1928, 1951)のものは、対岸の四国本土の「下降式」とも、近畿中央部の中央式の「高起平進式」とも異なっている可能性が高い。下降が大きくない、伊吹島の上の世代のF0型の音調と、四国本土の香川県の「下降式」や近畿中央部の「高起平進式」との共通点・相違点を明らかにする必要がある。

付記：本稿は、2009年度科学研究費補助金基盤研究(C)20520359「録音資料によるアクセント研究」の研究成果の一部である。

(2009年9月16日投稿)

分析対象語彙(括弧内の数字は当該語彙の音声を本稿で扱う話者の生年。括弧内の漢字仮名交じり表記は、和田氏調査の話者1898・1951については中井の推定により、中井調査の話者1928については調査時のもの)

【5拍】 ● F0型(1898, 1928, 1951)：いきわかかれ(生き別れ), いのちがけ(命がけ), おもてむき(表向き), おんせんば(温泉場), かたくりこ(片栗粉), がらすばり(ガラス張り), しょーせつか(小説家), せんもんか(専門家), たからもの(宝物), つくりかた(作り方), はなしかた(話し

方), ひょーじゅんご (標準語), めりけんこ (メリケン粉)。●H0型 (1898, 1928, 1951): あけわたし (明け渡し), あばれもの (暴れ者), あらいはり (洗い張り), あらものや (荒物屋), いいつたえ (言い伝え), いいなづけ (許嫁), おくりもの (贈り物), かわりもの (変わり者), さくらいろ (桜色), ひろいもの (拾い物)。●L0型 (1898) うめあわせ (埋め合わせ), おーせつま (応接間), おきゃくさま (お客様), くだものや (果物屋), さんばんめ (三番目), とりしらべ (取り調べ), わからずや (分からず屋)。

【4拍】 ●F0型 (1898, 1951): いちがつ (一月), いちにち (一日), うぬばれ (自惚れ), えんぴつ (鉛筆), おんせん (温泉), がそりん (ガソリン), かなしみ (悲しみ), かんざし (簪), かんむり (冠), きみがよ (君が代), きょーしつ (教室), きりすと (キリスト), けんやく (儉約), こーえん (公園? 講演?), こーへー (公平), ことずて (言づて), ことわり (断り), しゃくはち (尺八), じゅーやく (重役), しょーせつ (小説), そーだん (相談), だいこん (大根), つくだに (佃煮), とーきょー (東京), どーぞー (銅像), にほんご (日本語), にんにく (葫), はいたつ (配達), はるさめ (春雨), ひしがた (菱形), ひのまる (日の丸), ひろしま (広島), ふくびき (福引)。●H0型 (1898, 1951): あきらめ (諦め), あけがた (明け方), あだうち (仇討ち), うたがひ (疑い), えんそく (遠足), おどかし (脅かし), かすてら (カステラ), かたまり (塊), かまくら (鎌倉), かまぼこ (蒲鉾), かんびょー (干瓢), ぎんこー (銀行), さかさま (逆さま), さかなや (魚屋), さぼてん (サボテン), さむらい (侍), しあわせ (幸せ), しきたり (仕来り), しゃみせん (三味線), つけもの (漬物), ともだち (友達), ぬかるみ (泥濘), はきもの (履き物), はじまり (始まり), はたらき (働き), ふところ (懐), ほーふら (ほうふら), まないた (まな板), もちごめ (餅米), よこはま (横浜), わりびき (割引)。●L0型 (1898): あかざれ (敷), おしろい (お白粉), おそなえ (お供え), おそろい (お揃い), かきとり (書き取り), がんじつ (元日), きんよー (金曜), すいよー

(水曜), たいほー (大砲), つきあい (付き合い), でんとー (電灯?), どーぶつ (動物), どーよー (童謡? 同様?), にんじん (人参), ひらがな (平仮名), わるもの (悪者)。

【3拍】 ●F0型 (1898, 1951): あたま (頭), いのち (命), おーぎ (扇), おとこ (男), おもて (表), かがみ (鏡), かたな (刀), きゅーり (胡瓜), こころ (心), ことば (言葉), すがた (姿), たから (宝), なみだ (涙), ひばし (火箸)。●H0型 (1898, 1951): いかだ (筏), いかり (錨), いわし (鯛), かざり (飾), かすみ (霞), きもの (着物), けむり (煙), せなか (背中), となり (隣), はじめ (初め), はなじ (鼻血), やなぎ (柳)。●L0型 (1898): うさぎ (兎), うなぎ (鰻), ねずみ (鼠), まこと (誠)。

【2拍】 ●F0型 (1898, 1951): あし (足), いけ (池), いぬ (犬), いろ (色), うで (腕), うま (馬), おや (親), かい (貝), かみ (髪), くも (雲), こめ (米), さか (坂), しま (島), つき (月), なみ (波), はと (鳩), はな (花), はら (腹), ふろ (風呂), まめ (豆), やま (山), ゆび (指)。●H0型 (1898, 1951): あめ (飴), うし (牛), うめ (梅), かお (顔), かき (柿), かぜ (風), かに (蟹), かね (金), かま (釜), きり (霧), くび (首), こし (腰), さけ (酒), すな (砂), たけ (竹), とり (鳥), はね (羽), みず (水), みち (道), もも (桃)。●H1型 (1898, 1951): いし (石), うえ (上), うた (歌), おと (音), かみ (紙), かわ (川), はし (橋), はた (旗), ひる (昼), ふゆ (冬), まご (孫), むね (胸), むら (村)。●L0型 (1898): いた (板), いと (糸), いね (稲), おび (帯), げた (下駄), そら (空), はし (箸), はり (針), ふね (船), まつ (松), むぎ (麦)。

## 参考文献

上野善道 (1985) 「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40-2

- 上野善道（1995）「伊吹島方言アクセントの年齢別変化」『東京大学言語学論集』14
- 上野善道（2001）「伊吹島方言の4拍体言のアクセント」『東京大学言語学論集』20
- 上野善道（2007）「録音資料に基づくアクセント調査：香川県伊吹島方言の場合」『東京大学言語学論集』26
- 亀田裕見（2006）「四国北東部における下降音調の音声学的比較」『音声研究』10-1
- 佐藤栄作（1985）「香川県伊吹島方言のアクセント体系を考える」『国語学』140
- 妹尾修子（1966）「香川県伊吹島のアクセント」『国語研究』22
- 中井幸比古（2001）「香川県伊吹島方言のアクセント資料」上野善道編『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究』科研報告書
- 中井幸比古（2007）「香川県広島方言のアクセント」『音声言語研究のパラダイム』和泉書院
- 中井幸比古編（2009）『和田實・妹尾修子による香川県伊吹島方言アクセント録音資料 方言アクセント録音資料（1）』（DVD-ROM。wav ファイルと解説 PDF ファイルを含む）
- 大和シゲミ（2009）「近畿中央部若年層アクセントにおける式音調の変種」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』16
- 吉田健二（2008）「『式』の基本周波数上の特徴のパラメータ化」『論集Ⅳ』アクセント史資料研究会
- 和田實（1966）「第一次アクセントの発見——伊吹島」『国語研究』22